



石井  
大文

岩城寶記

七五  
大尾

壹

二

~ 13  
3304  
1





門へ13  
3304  
1

油漬

岩波実紀序

大正十年八月廿九日  
本大學出版部

東京牛久通町  
本貸本所  
京池屋謹啓

伊予の海の流り宿まれば記  
記を抄ねて又流るる重の  
を流るる伊予の海文  
字や岩波の家のり  
うらさうえりしと  
ふと考ゆるあつらひ



うまきをうまきとてしるすは  
柔なる 杉島や中津の山屋  
岩屋のちのちの音は暖かき  
さあとのあんとあつとて  
あまをそとへんま  
う 枝をまきまき 屋の地と  
みぎの里のうらやま村の  
のちのちのうらやま村の

さあとのあんとあつとて  
のちのちのうらやま村の  
柔なる 杉島や中津の山屋  
岩屋のちのちの音は暖かき  
さあとのあんとあつとて  
あまをそとへんま  
う 枝をまきまき 屋の地と  
みぎの里のうらやま村の  
のちのちのうらやま村の











茶畑を奮戦し全博を結集  
の事

巻一三

結城畑を存せし功海道彦

伝云の事

并命博を印し諱りて畑を

生植す

巻一四

佐竹義兵衛直房と海山

并三角を村上げして衆所下

向の事

巻一五

廣汎大云を村布し

事

并和田を豊泰津の計中を全

事



卷一六

一 和田系盛<sup>わかつた</sup>身<sup>み</sup>比<sup>ひ</sup>君<sup>きみ</sup>人<sup>ひと</sup>傳<sup>つた</sup>云<sup>い</sup>の事<sup>こと</sup>  
系<sup>けい</sup>千<sup>ち</sup>代<sup>だい</sup>能<sup>のう</sup>姫<sup>ひめ</sup>者<sup>もの</sup>心<sup>こころ</sup>五<sup>いつ</sup>州<sup>しゅう</sup>一<sup>いつ</sup>り<sup>り</sup>向<sup>むか</sup>  
の事<sup>こと</sup>

卷一七

一 千<sup>ち</sup>代<sup>だい</sup>能<sup>のう</sup>姫<sup>ひめ</sup>多<sup>おほ</sup>存<sup>ぞん</sup>が<sup>が</sup>結<sup>むす</sup>よ<sup>よ</sup>の事<sup>こと</sup>  
并<sup>な</sup>千<sup>ち</sup>代<sup>だい</sup>能<sup>のう</sup>姫<sup>ひめ</sup>西<sup>にし</sup>色<sup>いろ</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>款<sup>くわん</sup>と<sup>と</sup>計<sup>けい</sup>の事<sup>こと</sup>

卷一八

一 千<sup>ち</sup>代<sup>だい</sup>能<sup>のう</sup>姫<sup>ひめ</sup>又<sup>また</sup>と<sup>と</sup>將<sup>まさ</sup>少<sup>せう</sup>と<sup>と</sup>云<sup>い</sup>の事<sup>こと</sup>  
并<sup>な</sup>岩<sup>いわ</sup>冨<sup>ふ</sup>中<sup>ちゆう</sup>津<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>進<sup>すす</sup>入<sup>いり</sup>と<sup>と</sup>拒<sup>こ</sup>  
の事<sup>こと</sup>

卷一九

一 胡<sup>こ</sup>老<sup>ろう</sup>岩<sup>いわ</sup>冨<sup>ふ</sup>通<sup>とう</sup>房<sup>ぼう</sup>子<sup>こ</sup>再<sup>さい</sup>啓<sup>けい</sup>の事<sup>こと</sup>  
并<sup>な</sup>千<sup>ち</sup>代<sup>だい</sup>能<sup>のう</sup>姫<sup>ひめ</sup>岩<sup>いわ</sup>冨<sup>ふ</sup>通<sup>とう</sup>房<sup>ぼう</sup>子<sup>こ</sup>再<sup>さい</sup>啓<sup>けい</sup>の事<sup>こと</sup>  
事<sup>こと</sup>

卷一拾



一 胡老母の合津の昔向の事  
并 遠民信重先師の事

巻一終

一 梅石の事  
并 関谷の事

巻二終

一 佐升の事

并 小松の事

巻三終

一 岩城の事

并 村長の事

巻四終

一 村長の事

并 村忠の事

巻五終



一 万壽姫 医王の城守の捕りし事  
并 足身之世幸の侍りし事

巻拾六

一 医王丸之世幸の侍りし事  
并 次中印足身 医王丸を内し  
事

巻拾七

一 地蔵王の医王丸が身代りの事

并 親智如為七巻巻の事

事

巻拾八

一 万壽姫 河幸の建定初の事  
并 親智如為 医王丸を内し  
事

一 万壽姫の早大兩院及討証の事

并 同院及 医王丸と山懐徳の事



巻一 幼孫

玉鏡姫を皇太子の御養育の事

系丹に於て海を狂乱の事

巻一 幼孫

勅命を奉りて乃に陸運の上り

系由元 物治四喜より丹倉守山 務

秋後玄の事

巻一 幼孫

魚之山 今致事 乃に御討の事

系白川の関致事 物治昌也 御致

の事

巻一 廿三

以各城を致し 乃に御討の事

系下妻の姫の早天 乃に御討の事

巻一 廿四

下妻姫の早天 乃に御討の事



耐る事

系こゝろたり乃隆たか凱かゝ流りゅう丹たん後ご事ことは任にん入い初しょ  
の事

卷 廿五

一  
三さん豆まめを印いんつつ取と飛とよよ伏ふ一一母はは云い取と  
鑑かんの事

系よひひめ百ひゃく高たか姫ひめの夫むすこ大おほ山やま之の母はは大おほ持もち院いんと  
何なにととかんかんふふ事こと

系い山やま之の母ははがが岳たけ由ゆ母ははの事

以上惣目録



池清

岩波実証巻とそと

目録

- 一 岩波中東の事いんぱちゆうとうのじ
- 一 金澤市印彦院迄の事かねざわしちんげんいんていへのじ
- 一 系岩波道彦出勢の事けいいんぱだうげんしゅせいのじ



岩城家系圖

桓武天皇後胤

鎮守府將軍前陸奥守平貞盛朝臣  
孫陸奥權頭平安忠

平安忠 陸奥權頭

平則道 岩城次郎太左

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



俊道 小五郎

女子守山兵室  
女子中村兵室

道房 棉部次

道隆 玉王丸

道八 丹後守  
駿河守

道保 兵部太史

道義 小次郎  
陸奥守

時道 右衛門亮

常道 左衛門尉

胤道 伊勢守

女子村岡何某室

綱道 治部太史

正道 常陸次

親道

女萬珠姫

忠道 式部太史  
吉林  
貞隆 忠次郎  
兵部太史

道純 式部太史  
實佐竹常陸次義重男

爲道 権之亮  
宣隆 但馬守

親隆 左京太史  
重隆 伊豫守

實伊達時宗嫡男



重隆 左京大夫

景隆 権之助

常隆 同

秀隆 伊豫守

某 十次郎早世

隆 恕

隆 詔 河内守

實松平隆奥守吉村勇

伊達肥前守村與男

隆 泰 左京亮

女子細川氏室

油漬

岩城家系記卷しき

岩城家由母之事

系令隆を中近公近所出勢の事

柞岩城家の系圖をくわぬ

桓我天里の後胤隆也

府のお平隆貞の平の貞盛







陸文政三年七月十日卒に  
其子左衛門右衛門父の家を  
継ぐ天正十一年の夏冥白  
秀吉公も其の北条父子を征  
伐の時左衛門右衛門軍勢を  
率いし其の隙をちやみり志  
願をまけり日七り此る日ま  
是の命ありて卒に年廿也

兼とて安えりる左衛門男子は  
うしうしが家長白土操傳也  
増田右衛門尉長盛より其の  
家の施せん事とていへり  
きて下へ藤あはれを依り  
つる陸のゆきを三男能仕  
在ると今年より卒り  
ありてなりけるは陸にせらる







今度の上校を任付り  
ホトリのりあつてろを發見  
せり付さくさんとも  
三歳と孫を合せし  
あゆみの外実を平一  
三歳減せしよ少月を德  
川及び傍りあつて  
子供供りしよめさ  
く

あふげきや  
二歳を浮取せし  
うつう貞隆と  
石めし  
うつう貞隆と  
ぬき  
六年十一月十九日  
卒に男子一人あり



兄の佐舟の女を継ぎ修理  
きま又新陸と承あり次男を  
似るも宜陸あり父のあり  
きゆき〜安城家を承るれ  
明徳二年七月廿五日孫  
うへ平氏の子孫と承る  
家をつき其子孫と承る  
その子孫と承る

弟の子世に河内を陸信家  
をつぐ家と承る陸信家  
村が承る遠祖と承る村  
男ありその子孫と承る  
其子孫と承る  
其子孫と承る  
其子孫と承る  
其子孫と承る



とらひつる物りとり  
登之義四反よおふく  
序孝文訓述の孫孫孫孫  
房ハ王姓と委房の長  
公安を大ふくくくく  
ふをあさる免公使衆の感光  
登んみく父祖のくく  
の陸軍職をくくむりなき  
その

武法より伝れその子孫  
その子孫道あるを孫  
勇父よあふくくく  
伯父初明七くく道の子孫  
の世のくくく武威や  
やくくくくく玉果を  
くくくくくその子孫  
馬王のくくくく民







くも。款云つよ〜  
海の伏せば年をみるり  
志ささるひ也伏山賊性還を  
ふさぎいゑ根遠道の后たて  
会致利あまきをきり賊招  
金庫きゆと和暖まゐり  
り軍をゆ〜  
いたり源三信は禍〜款云つ

よ〜〜  
加勢をみりり  
をく〜  
あゝ源三信の作らんと  
久〜  
つか〜  
い〜  
〜その後年〜







とややとと 烟をを  
出されを津を津が 付手  
奈下ととと 烟をを  
宿をよととと  
よ教をを ぶととと 大勢  
ありありととと 大勢  
と家の子を ぶととと  
今人よととと 大勢

向あるけり 大勢  
席小次中道 大勢  
金持ととと 大勢  
烟をを ぶととと  
ととととと 大勢  
ととととと 大勢  
ととととと 大勢  
ととととと 大勢



お勢 五千金入りありしれ  
の軍勢 子息なり。——と  
もこよ 擽人にて 死するちあさ  
かき 陣境より 互に 陣して 志は  
い——の 馬の 身をも やまを 免る  
り きの 中へ 常にお ありれん  
高き 山の 中へ 入りし 山  
ふさ——り ぬき かくして 三三

り ぐん——と せら しく する  
擽 兵 運 兵 隊 まで 中 ありし  
やう ありし 今 跡を 擽け  
今 中 ありし 山 ありし 山  
の 跡 ありし せら しく する  
ぬき ありし 山 ありし 山  
—— 山 ありし 山  
り ぬき ありし 山 ありし 山







はる時を人をも別はるる  
理ありしを考やわりのまゝ  
と云千余人を御懸よ侍  
一文字しりしをせむさき  
余侍を中する強合なり侍成  
期老はまの御しを奉向  
せよしをせむさき  
いふしをせむさき

よきりしをせむさき  
守りし小松の城を御し  
侍を御しをせむさき  
五侍しりしをせむさき  
山城のたぐひをせむさき  
六千余人をせむさき  
山城のたぐひをせむさき  
子ぬの切を御しをせむさき



一 大石大母を山のこゝろ  
つゝさきく 歌よせ母を  
年あみのちどをらんせん  
月事をもむる ありれのもの  
をおゆとく 恒安をあ  
歌よあそとまゆらけり

宏城家記巻之三 終

宏城家記巻之三

目録

一 宏城家系村名の相と攻極

宏城家系村名の相と攻極



光城宮記巻一

道尾村名の棚をせきぬき奉  
ふ棚を有る命を中納言  
の事

とて大村所を棚をせきぬき奉  
ち申の事有る命を中納言  
とてちとる命の事













一文(もん)字(じ)の(り)下(げ)文(もん)字(じ)より下(げ)け、  
カ(カ)リ(リ)目(め)横(よこ)に(に)字(じ)の(り)あ(あ)け  
と(と)し(し)る(る)志(し)の(り)片(か)先(せん)を(を)ら(ら)ど(ど)よ  
し(し)る(る)ま(ま)ん(ん)の(り)物(もの)組(ぐ)み(み)を(を)ら(ら)ど(ど)よ  
ん(ん)と(と)し(し)る(る)を(を) 胡(こ)克(こ)を(を)あ(あ)ら(ら)け  
き(き)ん(ん)め(め)ま(ま)へ(へ)し(し)る(る)方(かた)の(り)向(む)き(き)ぬ  
る(る)ふ(ふ)あ(あ)ら(ら)る(る)一(いち)字(じ)を(を)あ(あ)ら(ら)け  
と(と)し(し)る(る)を(を) 常(じょう)生(せい)と(と)し(し)る(る)を(を)あ(あ)ら(ら)け

あ(あ)ら(ら)る(る)を(を)あ(あ)ら(ら)け  
一(いち)字(じ)を(を)あ(あ)ら(ら)け  
カ(カ)リ(リ)目(め)横(よこ)に(に)字(じ)の(り)あ(あ)け  
と(と)し(し)る(る)志(し)の(り)片(か)先(せん)を(を)ら(ら)ど(ど)よ  
し(し)る(る)ま(ま)ん(ん)の(り)物(もの)組(ぐ)み(み)を(を)ら(ら)ど(ど)よ  
ん(ん)と(と)し(し)る(る)を(を) 胡(こ)克(こ)を(を)あ(あ)ら(ら)け  
き(き)ん(ん)め(め)ま(ま)へ(へ)し(し)る(る)方(かた)の(り)向(む)き(き)ぬ  
る(る)ふ(ふ)あ(あ)ら(ら)る(る)一(いち)字(じ)を(を)あ(あ)ら(ら)け  
と(と)し(し)る(る)を(を) 常(じょう)生(せい)と(と)し(し)る(る)を(を)あ(あ)ら(ら)け







新ぬふもつけきも事一も  
せに深きあはるりのけ堀を  
のりこくごうごうに深きまひ  
切くこまうりりり水が何ふも  
つて故もくさくは性を性り  
新ぬ一してたもまも相を  
のりこりりうかき平よ下知  
しりて早きよ火をうけたま

しよおろし風さけ  
しつるんのかつとゆえ  
よる深き刑部は烟をま球  
んと軍中をたまもまり  
りごうしりろのういさるん  
り水が一天くぬあぬのいさ  
くくぬがちひよあはぬま  
ぬる故の隠事よのせうぬ







出——イ西迎の徳男よとつゝ  
能登のゆ歌猪利よいさ  
事——築右のや知あり功成  
てのまら海軍どのさ云上し  
て忠告おこあつるしこれま  
高望の事ありしそそ石丸と  
あつげし——た刀を手にらり  
りてくれも道なき所月夜よ

りあつて——いあ——あつたを  
まけまればゆ。胡老のさ  
らのあを扱く——に後宿  
神のさあぬらもちやねの城  
をせえれとさんと物集三千  
今人無の事なをさる——  
れ——よる城甲——いさ  
ろ——あひの——は——るあ



水が宿老の村人をさそりて  
さげよ村をさすに強き  
勢いなるを昔のたゆめ  
たゆめ〜**な**〜とて  
おしりぬにさす母の松の城  
今もさすの西の宮の〜  
たゆめ〜  
さうしりぬ石壁の城に

下石壁の〜**た**〜  
さ〜  
つま事〜ありに母の  
死生さすのゆめゆめの  
六千をさす〜  
〜  
〜  
〜  
〜



まらふまの岩の釣かけ  
よせちまのやちのいり  
唐蹴たしうけのぬれ  
おしあも玉地よりを  
あまあ〜あ〜何のあま  
わつてら降ふをおこし長  
をく〜むもやまもやま  
軍門は降り〜天降を

か〜し〜や〜あ〜  
おより〜あ〜あ〜  
〜降付〜あ〜  
玉白の〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜  
格のよ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜  
〜あ〜あ〜あ〜



いー累代うー茶のあまをこれ  
際りー下りあををさるに  
平家俊時の中へあまの  
手りへあまのあまの  
う茶の茶をりりー世  
むりりーあまの事  
あーあまのあまの  
りりりーあまのあまの

のさるあまのあまの  
りりりーあまのあまの  
あーあまのあまの  
あまのあまのあまの  
りりりーあまのあまの  
のさるあまのあまの  
あまのあまのあまの  
あまのあまのあまの  
あまのあまのあまの



陽春ののりあり地  
よりのに彩胡をちり  
まうみしり門彩胡なる彩胡  
彩胡をちり何一なるか  
それうが彩胡をうまひさ  
んとは彩胡なる事ある  
そこの彩胡を物まさらんや  
それうが彩胡をうまひさ

てまをを洗一洗のそ  
まをまを洗一洗のそ  
せんとなんあにこれ  
まをまを洗一洗のそ  
それうが彩胡をうまひさ  
あんとは彩胡なる事ある  
と何くまを洗一洗のそ  
胡をまを洗一洗のそ



毛髮甲を一つぬき法軍  
より知して一文字よあし  
廣腕を連く一語をおひま  
よせんとたぐそく一露口を  
あし事一あしが語をちり  
と約よせて時分よ  
とたくりあかひい田女大  
とるりのちをを四女十後

り一まろも一おとれこの  
とと山の今月をよつたあは  
先年の軍兵指の板をこち  
んよくぶれとるゆへうち  
一がれ血りりしをり  
とちりよれか一あしよま  
とよのちよあし一あし  
とちりよれか一あしよま



いゝと 城門しろもんに交まじりよおし  
ひびきき三千よ人ひとの命いのちを  
をそらし 風かぜの音ねのたもと  
ろしとくちよあけりきり  
かせが 何なにらにわたりて  
るまよ 日ひ曇曇るまよのいそ  
さる 畑はたけえりのあれは  
土つちよ 畑はたけの味あじ方をあじら

よまよまよあし 十じゅうある 鹿か鹿か  
の勢せい力のりきあし ありても  
は 畑はたけに 入り 畑はたけの味あじ方をあじら  
よまよまよまよまよのいそ  
まよまよ 鹿か鹿かのいそ 命いのちを  
張はりしとせえくちよまよまよ  
味あじ方かたの味あじ方かたが畑はたけのいそ  
よ入りしとせえくちよまよまよ



この世川谷河邊房の金身  
少少申すに旗本よりこし  
際平をとりて三谷金持  
やろききと長子とをのちり  
をの射子をとるうし  
よきんがしよ射とせり  
精舎の手ぶれありり水が  
うぶかたのうらあし  
大筆

のやへ射心事あれた  
やぶ矢とつてさちとさし  
甲のさる向少中橋高陸の  
透るも七通の事あれた  
さしに継承しおよびるを  
射れはてはるさし  
何れ橋ありし金持  
報しこの記録し射を



まさしれくを物よあし  
まをばけの宿をり知して  
るを討よものごとく年  
こしよちさそそ大さ力志甲  
よせーあてーと山とおん  
て金持き印が旗の中  
りりて入りてあゆみ  
あひけし南ふよあまあ

函ある款きが馬のり  
まをりまきおとーま  
有をもるまおまが  
りうとまぬが  
てりしりよ物つぬけ  
まのてりしりま  
千髪万化のまをく  
神まれまこの別



いんごうれ倉津惣さんど  
子切りまぐりれ銭さきよ  
と倉わらきを彦内も天考より  
ありて乱軍の中をきりぬけ  
城の中へ引入胡老の軍を  
よもつけがらませんよ速  
あゝあひうる年矢く  
より又射出に矢をひく  
る

の小籠をいりここと  
は其のうらり倉津を  
彦内を城の中へ入り  
城門をくぐりて一隊  
射をうたぐりや  
社をたき免て射さし  
大石をたきこも也  
いんごうれ



事をも戦うべしと云ふ事  
胡老張軍平より知をつたへ  
長あひまはゆるしに款を  
をゆけたり戦ひを  
てそまへありしを  
をよし張軍をよと免城を  
をよし事十町を  
し今用いんごま陸を列

移し昭るをおきしとま

子持しりりる 池清

岩城実記巻之貳ノ年 池清



